

梅が花を咲かせ、沈丁花が香りを放っています。讚美歌 291 の「忍びて春を待たん、雪はとけて花は咲かん」という一節は印象的ですが、千葉ではもう春の訪れを告げても良いのでしょうか。はたまた、私たちの霊的人生は春を迎えるのに、まだ忍耐が必要なのでしょうか。今日の聖書箇所はわずか3節ですが、ここにも主なる神様の語りかけがあります。

A. 律法学者たちには気をつけなさい

①律法学者

律法学者はパリサイ人が多かったのです。バビロン捕囚後から、彼らはシナゴグ（会堂）や家庭で律法を教えていました。律法学者は多くのユダヤ人に律法を浸透させるのに貢献しました。やがて、律法を教える者たちは、ユダヤの民の生活と宗教を支える人々となり、次第に専門家となっていきました。

②イエスさまの律法学者についての指摘

- ⑦長い衣をまとって歩き回る 人の中では目立つ長い衣を着て、自らの立場を誇示しました。
- ⑧広場で挨拶されるのが好き 「先生」と言われたり、敬意を払われたりすることを喜んだのです。
- ⑨会堂の上席や宴会の上座が好き 会堂の上席は一段高くなっていたので、目立ったのです。
- ⑩やもめの家をくいつぶす やもめに与えられた財産分与の裁定を助け本人以上の利益を得たりしたのです。
- ⑪長い祈りをする 人からの誉れを求める祈りでした。長いのが悪いのではなく、問題はその動機でした。

B. なぜ律法学者の行動はおかしいのか

①彼らの心は水平方向

彼らの心は人の方を向いていたのです。人から評価を受け、人からほめられ、人に優越感を感じることを喜びとするのです。神中心ではなく、人間中心になっていました。水平方向にむいていました。

②何を目指していたのだろう

律法は主なる神から賜ったものです。それは、人が神に向かわせることに本旨がありました。律法を目指すところは恵みです。主なる神からの縦方向です。人間を目指す方向も縦方向であるはずですが、ところが、律法学者という人間が介在して、目指すところがおかしくなったのです。

③偽善

マタイの福音書 23 章はルカの福音書 45～47 節の並行記事ですが、ルカの記事を理解する良い解釈の章ともなっています。その中に、「忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人」という表現が何回も出てきます。律法学者は表面では神を語り、神を教え、外側を整えるが、内側は人間的なものでいっぱいであると、イエスさまは指摘されたのでした。

③厳しい罰を受けると

こういうありかたに対して、主は「人一倍きびしい罰を受ける」といわれています。つまり、律法学者という神の職務にある者は神の栄光を目指すべきなのに、自分を栄光のために心を用いていたのです。

C. 今日に当てはめるならば

①牧師や神学教師や伝道者は気をつけなければならない

神の言葉を伝えていても、中身は空っぽということになりかねません。神の言葉を語っていても、空々しく、空虚な言葉となりかねません。律法学者に対する警告はまず牧師や神学教師や伝道者に向けられるべきでしょう。そうでないと、わかってもいないのに、わかった振りをするような愚をおかしてしまいます。

②信徒一人ひとりも何をみているのかが問われる

それでは、信徒に対して、この警告はされていないのでしょうか。いえ、そうではありません。この警告は聖書を読む一人一人にも向けられているのです。神を信ずる者は神を見上げるのです。神の霊の高みへと成長させていただくもの達です。ところが、すぐに人に目が向いてしまいます。人に関心を向け、人と比べたりして、神を見上げることを怠ってしまいやすいのです。低空飛行であれば、偽善にはならないかもしれませんが、肉の力が強く働く方向に進みます。

結論・適用

主なる神は私たちに「恵み」を示されていますが、律法学者は恵みの世界を人間の価値基準の世界に引きずり下ろしてしまったのです。私たちも同じようにしやすいのです。恵みの福音がそのまま私たちに入れば、私たちは主の御前でひざまずくのです。その方向に平安があり喜びがあります。たとえば、「何も思い煩わずに・・・祈れ」という御言葉を人に言うのは易い。問題は自分に思い煩いが生じた時にどうするかだ。信じて祈りだせば内と外の一一致が始まる。これが主の方向（縦方向）に向かうという事です。水平（横）方向に向かうならば、世の中のあり方と全く同じで思い煩いは続きます。恵みの関係をいただいでいきましょう。